

【日本の大学】第54回——信州大学：伝統、文化を継承、発展

信州大学は本州の中央、長野県内にあった高等教育機関7校を母体として1949年に設立された国立大学である。7校は医学、教育、工業、農業、繊維の専門教育機関であり、それらを包括・継承した医学部、文理学部、教育学部、農学部、繊維学部という5学部でスタートした。発足当時、教職員1304名、学生総定員3440名と、全国屈指の規模を誇る国立大学であった。

長野県は山々に囲まれた自然環境豊かな土地柄であり、信州大学は長野県の旧国名である信濃の国の別称「信州」を名乗っていることからわかるように、県内各地の伝統や文化を受け継いでおり、キャンパスが県内全域に展開しているのも大きな特色である。



大学大門

「教育県長野」を支える

以下、信州大学のホームページなどから大学の歴史と現状をみていこう。

大学設立につながった高等教育機関の中で、最も古い歴史のあるのが長野師範学校であろう。1873年に設置された長野県師範講習所が2年後の75年には県師範学校となっ

た。その後、松本支校との統合、女子部の設置などがあって、信州大学の開校とともに1949年に教育学部の発足へとつながった。

現在は学校教育教員養成課程 14 コースがある。1 年次は全員が他学部の学生と一緒に本部のある松本において共通教育科目を中心に学ぶ。2 年次以降は長野キャンパスで、専門領域を学び、高度な専門性と実践的指導力を身につけていく。

1919 年に設立された旧制松本高等学校からの伝統を受け継いで発足したのが文理学部（文科）である。文理学部は 1966 年に人文学部と理学部に分かれ、さらに 78 年には人文学部から経済学部が枝分かれした。1982 年には大学院人文科学研究科（修士課程）が設置されている。人文学部は、人間の本質や行動様式、社会や文化の仕組みなどについて幅広い視野からの探究を試みている。哲学・芸術論、文化情報論・社会学、心理学・社会心理学、歴史学、比較言語文化、英米言語文化、日本言語文化の 7 コースがある。



松本高等学校跡地

文理学部から分かれてできた理学部は当初、数学科、物理学科、化学科、地質学科の 4 学科と共通科目として動物学と植物学の分野を設置してスタート。その後、生物学科の増設（1975 年）、大学院理学研究科（修士課程）の設置（1976 年）、6 学科への改組（1995 年）、博士課程の設置（1998 年）などを経て、2015 年には 6 学科を数学科と理学

科の2学科、7コース（数理科学、自然情報学、物理学、化学、地球学、生物学、物質循環学）へと改組している。

長野県は県民が教育に熱心な「教育県」と呼ばれてきたが、教育学部や文理学部の存在が、教育県の歴史や伝統を支えていると言えるだろう。

8番目の学部として1978年に設置された経済学部は経済学科だけだったが、1995年に法学科を設置して2学科体制となり、2016年に経法学部（応用経済学科、総合法律学科）と名称を改めた。学部は「社会から求められる人材を育成する」との観点から、経済学や法学という専門分野に軸足を置いた教育を行うとともに、理系など他分野の専門科目も幅広く提供している。講義などで学んだ理論を実際に社会で使ってみる実践・実習系科目や社会の一線で活躍している有識者による講義を用意している。

医学部は1944年に設置された松本医学専門学校から始まっている。48年には松本医科大学となり、翌49年に信州大学の設置とともに同大医学部となった。医学科、保健学科があり、基本理念として豊かな人間性、広い学問的視野と課題探究能力を身につけた臨床医、医療技術者や医学研究者などを育成するとともに、高度で個性的な医科学研究を行う。また医科学の教育・研究と医療活動を発展させることによって地域貢献を果たし、国際交流に寄与する、としている。



竹内松次郎先生の銅像。初代松本医学専門学校長、初代松本医科大学長、初代信州大学医学部長として信大の発展及び信大医学部の礎として貢献した先生。

信州大学発足とともに設置された工学部は、1943年に創立された長野高等工業学校からつながっている。学部発足の際は、機械、電気、通信、土木の4工学科でスタートした。その後工業化学科、精密工学科、合成化学科、情報工学科、建築工学科が加わり、1981年時点で9学科の体制となった。それを1989年に生産システム、電気電子、社会開発、物質、情報の5工学科に再編した。その後何度かの改組を経て2016年に物質化学科、電子情報システム工学科、水環境・土木工学科、機械システム工学科、建築学科の5学科体制となっている。



工学部

農学部は第2次大戦終戦間近の1945年4月に開校した県立農林専門学校から始まっている。49年に信州大学設置に伴って農学部として吸収された。農学科と林学科の2学科で出発。畜産学科の増設（1960年）、農林工学科の増設（65年）、農学科を組織拡充して園芸農学科に変更するとともに農芸化学科を増設（67年）など守備範囲の拡充が続いた。

その後も何度か、組織の改変を重ねてきたが、2015年に大幅な改組が実施され、1997年から続いてきた食料生産科学科（4講座）、森林科学科（4講座）、応用生物科学科（4講座）を改め、農学生命科学科の1学科とし、この中に生命機能科学コース、動物資源生命科学コース、植物資源科学コース、森林・環境共生学コースの4コースに再編した。

農学部では、信州の豊かな自然と風土の下で、生命・食料・環境を支える農学を基盤として、高度に進展する生命科学の視座を踏まえて、論理性、実践性、倫理性、創造性の高い教育と研究を行っていく。



農学部

国内唯一の繊維学部

繊維学部の前身である上田蚕糸専門学校は1910年に設立された。明治時代末期で、日本が工業立国として台頭しようとしている時期である。当時の最先端科学技術を背景に、蚕糸に関する日本初の高等教育機関であり、長野県下初の官立学校として設立された。

1944年に上田繊維専門学校と改称した後、信州大学の発足とともに繊維学部となった。スタートは養蚕学科、繊維学科、繊維化学科の3学科だった。その後、繊維技術の変化や発展に伴って近年は、広く用いられるようになった炭素繊維や浄水器のフィルターなど、多くのものが繊維技術を背景に造られるようになっている。最近では、建築材料、電子材料、機械材料などの多くの産業資材にその用途が拡大されている。

学部の理念としては、衣食住の要である“繊維”に根ざした伝統的な科学技術を背景として、学際的先端科学技術のさらなる展開を図り、21世紀における文化創造科学技術を開拓する。さらに、優れた人格と国際性を有し、未来を創造しうる広い視野と高い

能力を持つ技術者、高度専門職業人、研究者を養成する。

理念を実現するための組織として、現在は先進繊維・感性工学科、機械・ロボット学科、化学・材料学科、応用生物科学科の4学科で構成されている。



繊維学部

県内各地に5キャンパス

以上の学部や大学院は長野県内各地に広がっている。本部のあるのが県中央部の松本キャンパスである。国宝松本城の城下町であり、北アルプスへの玄関口でもある松本市にあり、本部のほか、人文学部、経法学部、理学部、医学部やそれぞれの大学院、附属施設がある。また、全学部の1年生が最初の1年間共通教育を学ぶ全学教育機構もここにある。これは、キャンパスが散らばっていることや、学生の7割ほどが県外のさまざまな地域から集まっていることから、そうした出自や目指す学問の中身の異なる学生が信州大学生としてともに過ごし、成長する場となっている。

県の北部、県庁所在地の長野市には二つのキャンパスがある。その一つが市の中心部、善光寺や県庁のそばにあるのが教育学部のキャンパス。教育学部のレンガ造りの書庫は、1895年に県庁舎の書籍庫として建設されたもので、国登録有形文化財に登録されている。



教育部

もう一つは、長野駅の南側、犀川の近くにある工学部のキャンパス。工学部と大学院の理工学研究科、総合医理工学研究科などがあり、国家的プロジェクトとして産学官が革新的な造水・水循環システムの構築をめざす世界的研究拠点「アクア・イノベーション拠点」もある。

農学部のあるのが伊那キャンパスである。中央アルプスと南アルプスを臨む風光明媚な伊那谷にある。所在地の南箕輪村は、日本で唯一の「国立大がある村」である。圃場、附属農場、演習林を併設した広大なキャンパスは、標高が約 770m と国立大学で最も高い場所にある。

真田家ゆかりの城下町の上田市にあるのが、繊維学部のある上田キャンパスである。「蚕都上田」と呼ばれるほど蚕糸産業が盛んであり、繊維学部の教育は前身校を入れると 100 年以上の歴史がある。大学では特色のある研究領域に資源を集中的に配分する「先鋭領域融合研究群」を 2014 年に設置した。カーボン、環境・エネルギー材料、ファイバー工学、山岳科学、バイオメディカルの 5 分野が対象で、学内の若手研究者の育成や外部の卓越研究者の招聘によって、大学総体の研究力アップを図る。

大学では近年、大学の社会的責任のあり方として「社会貢献」を大きなテーマとして掲げている。地域社会と大学との連続的一体化、人材のつながりを高めていくことを大きな目標としている。地域貢献度が高い大学として評価されており、2021 年 10 月に就

任した中村宗一郎学長は「地域の中核大学としてこの地域の発展を本気で担っていきます」と“宣言”している。



卒業式・大学院学位記授与式の様子（2021年）

国際化に関しては、諸外国から学生・研究者を積極的に受け入れ、世界に開かれた大学として信州の国際交流の大きい推進力になるとの目標を定めている。2015年には「グローバル教育推進センター」を設置、すべての部局を「グローバル」という観点で横断的に束ねる中核組織と位置付けている。

信州大学に留学するには、（1）志望する学部で実施される私費外国人留学生入試に合格する（2）志望する研究科で実施される入試に合格し大学院に入学する（3）海外の大学に在籍しながら、半年から1年間留学する（交換留学）（4）大学院に進学する前に研究生として大学に在籍し、大学院を目指す——ことなどができる。大学間の国際交流協定は120大学と結んでおり、学部間の国際交流協定は89大学と締結している。

学生数は、学部学生が8863名、大学院が1954名、うち外国人留学生は313名である。職員数は2651名で、うち教員数は1139名である。（2021年5月現在）

学長の中村氏は、1976年島根大学農学部を卒業し、同大学院連合農学研究科博士課

程を修了し農学博士、1999年島根大学教授、2005年から信州大学農学部教授、2010信州大学農学部長、12年同副学長、同理事などを経て2021年10月から学長に就任した。

文：滝川 進

写真：信州大学 HP&FaceBook